

「雑誌における<料理>の記号性について —雑誌『クロワッサン』による—考察」

藤 塚 いづみ

序論

第1章 「ニューファミリー誌」としての「クロワッサン」

- 第1節 「クロワッサン」創刊
- 第2節 イメージとしての「ニューファミリー」
- 第3節 創刊号における「料理」の語られ方
- 第4節 「クロワッサン」における新しさ—イメージの提示

第2章 「新しい女」と料理

- 第1節 「女の新聞」としての再出発
- 第2節 「新・クロワッサン」とその周辺
- 第3節 「新・クロワッサン」の顔ぶれ
- 第4節 「クロワッサン症候群」という現象
- 第5節 2つの「クロワッサン」における連続性
- 第6節 「新しい女」とそのライフスタイル
- 第7節 向田邦子と「食」
- 第8節 「主婦」の存在

第3章 「家庭」の再生と終焉

- 第1節 家事の市場化
- 第2節 調理空間の変化と料理—台所からキッチンへ
- 第3節 外食産業の発達と男女雇用機会均等法—作る時代から買う時代へ

第4章 バブル期の台所

第1節 「おつきあい」と「お取り寄せ」

第2節 店の味を倣う

第5章 「家事」を楽しむ技術—家事労働から趣味へ

第1節 調理器具の多様化

第2節 「惣菜は創造」—家庭料理の復活

第3節 インテリアとしての「食」

第4節 ライフスタイルと個性

第6章 健康から「食」を見直す

第1節 ダイエット・ブーム

第2節 環境問題から「食」を考える—昔への回帰

第3節 豊かな老後のために—「クロワッサン」は成長する

結論 「クロワッサン」—より快適な生活をめざして

参考文献一覧

1. 本稿の位置

- ・ 1970年代後半、家事労働としての「料理」は、時代を下るにつれて「ライフスタイル」の一部として考えられるようになった
- ・ 「クロワッサン」を通して、「料理」の文化的な記号性の変化を読みとること

2. 方法論とそのオリジナリティ

- ・ 対象とする雑誌は「クロワッサン」に限定
- ・ 1977年創刊から2002年まで、「料理」という一つのキーワードに絞って分析
- ・ 「クロワッサン」の提示した、「ライフスタイル」やその変化について分析と考察

3. 分析対象とする雑誌について

- ・ 1977年5月に、平凡社版（現マガジンハウス）より出版され、現在も刊行中

・「クロワッサン」を対象雑誌に選択した理由として、

①1977年の創刊以来売上数が安定しており、現在も刊行中の雑誌であるという点

その中で、「クロワッサン症候群」という言葉を生み出した程話題性があるという点

②対象となる読者が、20代から80代という幅広い年齢層に設定されている点

③隔週雑誌であるため、「料理」記事の流れを、月刊雑誌よりもより正確な把握が可能であるという点

4. 先行研究について

1. 西田豊和「雑誌『クロワッサン』に見る家族観について」¹

「クロワッサン」を、「家族」という観点から分析したもの→1章

2. 松原惇子「クロワッサン症候群」²

「クロワッサン」と読者の関係を、女性の自立や結婚という観点から、一雑誌の影響と実体を調査・研究したもの→2章4節

3. わいふ編集部「アンチ・『クロワッサン症候群』」³

「クロワッサン症候群」に反論する形で出版されたもの

阿部美砂江「『クロワッサン症候群』の誤り」、「『クロワッサン』は何をしたか」→2章4節

第1章 「ニューファミリー誌」としての「クロワッサン」：1977年

・1977年4月10日、「ふたりに読むニューファミリーの生活誌」として創刊されるが、不評

・「クロワッサン」の提示する、「家族（ニューファミリー）」概念の共有

・「家族」を前提としたテーマ配分、誌面の約4割を料理記事が占める

・「労働としての家事」と「所帯臭さ」の回避／「家事労働」としての料理のイメージからの脱却

・ライフモデルの提示と情報の発信→「クロワッサン」の特徴

第2章 「新しい女」と料理：1978年～1982年

- ・ 1978年5月10日、“新しい生活情報を速報する女の新聞”へ具体的な内容から、「生き方」抽象的な内容への180度の転換が雑誌を成功させる
- ・ 「新しい女」の生き方を提示し、「個」としての存在を意識したタイトルへ変わる
ex 「ファッションは私のおしゃれ」、「女の仕事部屋」
- ・ 料理に関する記事の割合が激減する
- ・ 「クロワッサン」と読者の関係：「クロワッサン」の「演出」効果
“人生のロールモデル”の提示→「クロワッサン症候群」という現象
桐島洋子・向田邦子・犬養智子・市川房枝など
新しい生活の提示→主婦の解放
- ・ 「クロワッサン」におけるフェミニズム→アメリカから入ってきたフェミニズムを意識しながらも、現実の生活の質を向上させるための具体的なモデルを提示していった
- ・ 新しい女を主張しながらも、主婦の存在は決して無視されていない
- ・ 「クロワッサン」に描かれる女の3つの型と料理
「新しい女」：ライフスタイルを語るキーワード
家事分担型「理想達成女」：共同作業としての意味
「専業主婦（プロフェッショナル・ミセス）」：スキルを向上させるべきもの
- ・ 向田邦子にとっての料理の描かれ方
→家事労働としてではなく、趣味の料理であり、「新しい知的な女」を語るキーワードである
- ・ 向田邦子のスタイルが、今後25年間の「クロワッサン」におけるキーワードとなる

第3章 「家庭」の再生と終焉：1980年代

- ・ 誌面が抽象的な問題よりも具体的な問題を扱うようになる

- ・電化製品の流入と家事の合理化
- ・女性の社会進出と誌面の変化→家事を一層強化するものとなる
- ・外食産業、昼食産業の発達による誌面への影響
- ・家事の合理化と手抜き境界線
- ・食品の安全性と家事の必要性

第4章 バブル期の台所：1980年中期から後期

- ・「美食ブーム」に流されない誌面：「クロワッサン」と世間一般のずれ
- ・レシピのない料理記事→イメージを膨らませて料理を楽しむ
ex「尊敬する鰯、鯡、鯖のために」（1988年マガジンハウス）

第5章 「家事」を楽しむ技術—家事労働から趣味へ：1990年代～

- ・単に料理の調理行為のみをとりあげるのではなく、調理器具・食器・キッチンなどの特集が組まれるようになる
- ・家事労働としての意味は完全に消され、料理は趣味化する

第6章 健康から「食」を見直す：1990年代～

- ・「食べる」ことから、台所を中心としたすべての問題をとりあげられる
- ・家庭の領域を超えて、社会問題を意識したテーマがとりあげられるようになる
ex環境問題、介護問題

結論 「クロワッサン」—より快適な生活をめざして

- ・現在の料理は、本来の「調理」の意味を超えている
- ・現実の問題を意識しながら、理想とする生活を提示する「クロワッサン」の手法は、料理の記号性の変化を検証するのに非常に有効である
- ・「クロワッサン」における「料理」は、生活レベルの向上を目指して、新しいものを提示する試みの一環であった
- ・読者とともに「成長するクロワッサン」

参考文献一覧

- ¹ 西田豊和「雑誌『クロワッサン』にみる家族観について」政治文化、比較日本研究会編、1996年通号13号 P65-86
- ² 松原惇子「クロワッサン症候群」1988.11、文藝春秋
- ³ 阿部美砂江「『クロワッサン症候群』の誤り」、わいふ編集部「アンチ・『クロワッサン症候群』」、1989.3.15、社会思想社、P14-15
阿部美砂江「『クロワッサン』は何をしたか」、わいふ編集部「アンチ・『クロワッサン症候群』」、1989.3.15、社会思想社、P30